

68 FILMS SAMURAI SHORTS

2003 BS-i+BS-FUJI + goggle+dentsu tec

(キャバクラで、自分が殺し屋だと信じてもらえないコメディ／8分)

ショートフィルム 「キラー・ジヨウ」

第3稿 脚本 大岡俊彦

配役

中年ジョー(40)	有沢康博
アケミ(23)	小橋めぐみ
ミサキ(20)	中川愛海
田中兄(75)	(オーデイション)
田中弟(70)	(オーデイション)
ジョー(20)	(殺し屋。オーデイション)
タナー兄(55)	(宿敵。オーデイション)
タナー弟(50)	(宿敵。オーデイション)
恵子(20)	小橋めぐみ(二役)
しおり	(キヤバ嬢。オーデイション)
千夏	(キヤバ嬢。オーデイション)
樹利亜	(キヤバ嬢。オーデイション)
ジャスミン	(キヤバ嬢。オーデイション)
追手A	内トラ
追手B	内トラ
店のキヤバクラ嬢たち	エキストラ
店の客たち、ボーイ	エキストラ

○クレジット

○夜、裏道（回想）

闇。走る男の足音。息づかい。  
ジョーVO「暗闇の中、俺は追手から逃れてい  
た」

壁にもたれて休む男（ジョー）。左手に握  
った銃。

ジョーVO「死神と呼ばれた俺がしくじったぜ。  
残りの弾丸は三発。俺はその絶体絶命を楽し  
んでいた」

サングラスをかけ、自嘲するジョー。

○キャバクラ

かけていたサングラスを外す中年男。  
（部分ショット。しばらくどんな男か分  
からない）

テーブルに置かれたそれは、回想でジョ  
ーがかけていたものと同じ。

相手をしていた向いのキャバ嬢ミサキ、  
興味深げに。

ミサキ「えー？ それがそのサングラスー？」

中年男「触ってみる？」

ミサキ「うわー（笑）」

キャバ嬢アケミが、男の隣に座る。

アケミ「失礼しまーす」

中年男「失礼されまーす」

アケミ「（笑）アケミでーす」

ミサキ「ねえねえこの人の話超面白いよ」

アケミ「（酒をつくりながら）お仕事とかなにし  
てんの？」

はじめてフルショット。中年男は、でっ  
ぷりしていて精彩がない感じ。

中年男「オレ？…殺し屋。」

ふたり大爆笑。

アケミ「そんなわけないじゃん！（笑）」

ミサキ「マジおもしろい！ サイコー（笑）」

首をかしげている中年男（中年ジョー）。

憎めないキャラだ。

○タイトル 『キラール・ジョー』

○夜、裏道（回想）

スキンヘッドに散弾銃を持った背の高い男（タナー弟）がほえている。

タナー弟「まだか！ キラールジョーはよお！（死神のタロットを出し）このカードで予告なんてやり方はもう時代遅れなんじゃないスカ！？ ねエ兄貴！」

空に一発撃つ。ジャキッ。

後方には、猿ぐつわをされ、殴られた跡のある女（恵子）と、背の低いスーツの男（タナー兄）。

タナー兄「まあ落ち着け。女を持つてるのはこっちだ。奴が人間ならいずれここに来る。それとも、アンタは本当の死神と恋をしているのかな？」

恵子の髪をつかむタナー兄。

はげしくにらみ返す恵子。

タナー弟「ハハハハハハ早く来いよ死神さんッ！おめエの評判はタナー兄弟が喰ってやるぜッ！！」

○キャバクラ

アケミ「で？ で？ で？」

中年ジョー「信じてないでしょ」

アケミ「違うの！ 続きは！」

○夜、裏道（回想）

ジョーVO「キラール・ジョーの得意技は左手撃ち。右利きなんだけど、銃は左手」

カッコいい音楽。以下、PV風のノワール演出（ハイスピード撮影多用）。

追い詰められたジョー。左手にもった銃。明滅する水銀灯。

コートをはひるがえし構える。  
追手ふたりが迫っている。

横に走るジョー。

追手、銃を何発も撃ってくる。

横に走りながら二発撃つ。

倒れる追手A、B。

ジョーの銃は、左側から薬莢が吐き出される。(そういう銃がなければ左右反転で

表現?)

ジョーVO「ジョーの銃は、左利き専用なのさ。

さあ残りの弾はあと一発だ。敵は凄腕のタナ

ー兄弟。いつもは雇いの殺しじゃない殺し

屋が、はじめて自分の為に動いた。それがミ

スだった」

○キャバクラ

アケミ「どんなどんな？」

中年ジョー「：情が入ると、こわくなる」

ミサキ「こわくなる？」

中年ジョー「好きな人に銃を向けるときの気持ち」

アケミ「銃を向けたの？」

中年ジョー、カッコつけて左手で銃をむけるふり。

○夜、裏道(回想)

同じポーズで銃を構えるジョー(OLっぽいなど)。

その先にはタナー兄弟、恵子。

タナー弟「アーツハツハツハツ！ よく追手を

かわしたな！」

タナー兄「どうする？ 2対1だぜ。」

銃を恵子に向けるジョー。

タナー兄「：おい、この女狙ってるフリして何たくらんでる？」

恵子の後ろに隠れる兄。

タナー弟「おい！聞いてんのか？ アニキの言

葉をよオ!! (詰め寄る)」

ジョー、引き金を引く。

銃弾目線。発射された弾は、恵子と兄のわずかな隙間へ。

落ちる猿ぐつわと、眉毛。

タナー兄「あ(右眉を触る)」

恵子「ジョー………!!!」

○キャバクラ

中年ジョー「そこでタナー兄弟は戦意喪失。助

けた彼女、恵子が、今の奥さん」

ミサキ「すごーい」

アケミ「ていうか、よく出来てる」

中年ジョー「いやいや作り話だと思ってるだろ?」

アケミ「(笑)めちやくちや作り話でしょ」

中年ジョー「そういえばアケミちゃん、あの時の彼女にそっくりだ。」

アケミ「(爆笑)超ウケる。それじゃあウチのことは口説けないよ。」

中年ジョー「え?」

アケミ「だってそんなウソつく人一杯来るもん。」

(笑)

中年ジョー「ウソじゃないよ!」

アケミ「いやいやいやいや(笑)。なんで男の人って、カッコつけたがって嘘までつくの?消

防士とかさー、『オレ、トビ』とかさー」

ミサキ「あと、業界人。誰々ちゃんとマブ、とか多い多い。」

アケミ「前『オレ椎茸作ってる』とかもいた。」

ミサキ「(笑)」

アケミ「あとね、『俺は古い師だから、性感帯がどこか当てやる。乳首だーッ』って触られた。当たり前だっちゅーの」

ミサキ「で、お兄さん名前なんだっけ?」

中年ジョー「…キラー・ジョーっていいいます」

アケミ「(爆笑)ウケるウケる」

中年ジョー「今のは若い頃の話。20年前。ミサキちゃんが今まで一番苦労したバナシをし

たから」

アケミ「(笑)でもなかなかそんな事言う人いないよ！ ていうか一番面白かったかも。分かった。私はソックリなのね、その彼女に」

イタズラっぽく急に上目遣い。

中年ジョー「ホントに似てる。昔の恵子ソックリ。ちよっと目つぶって」

アケミ「？」

目をつぶる。

○夜、裏道(回想)

抱き合うジョーと恵子。恵子目をつぶり、  
熱いキスへ：

○キャバクラ

中年ジョー「ああ、恵子…」

アケミにチューしようとする。

アケミ「ちよつとなにしてんの！(笑) 奥さんなんでしょ？ その人」

中年ジョー「うん。家で待ってる」

アケミ「(笑)そのわりにはひとりて来てるし」

中年ジョー「そんなに嘘っぽい？」

アケミ「まあ、ここは話を楽しむ所だから。けっこうみんな話面白くする為に嘘ついてるよね」

ミサキ「え、嘘なんですか？ 私ほんとだと思ってた」

アケミ「だって、TBSの社長だけで50人ぐらいいるじゃん。こないだ首相もふたり来たし(笑)。殺し屋もいるね。この店だけで10人はいたね。」

中年ジョー「まじで？」

アケミ「あの人も、あの人も、えーと、あの人もそう」

色々パン。

明らかに違う(この客の中にキャバクラ有名人を混ぜたい)。

中年ジョー「あー！ー！ツ！！」

アケミ「なに？」

目線の先には、背の高いジジイの客（田中弟）。

中年ジョー「タナー兄弟！！」

アケミ「だれ？」

中年ジョー「さっきの話に出てきたでしょ！

地獄の兄弟、弟の方！」

席を立つ中年ジョー。

○同キャバラ内、田中弟の席

田中弟、キャバ嬢（しおり、千夏）と盛り上がっている。

田中弟「えー？ ポップコーンにマヨネーズ？」

つけて食べようとする。

しおり「ちがーうの。こうやって（ポップコーンにマヨネーズをつけて、そこに更にポップコーンをひつつける）つけて食べるの。はい、あーん。」

ドサリと座る中年ジョー。

田中弟「あん？ …あー！ー！！」

千夏「なにー？この人、田中さーん。」

中年ジョー「田中さん？」

田中弟「あつ…、ちよつ…」

中年ジョー「タナー兄弟って、まさか、田中兄弟ってこと？」

田中弟「知らないフリ）だ、誰なんだオマエ？」

中年ジョー「忘れもしねえぜ、20年ぶりか。

宿敵と思ってたんだぜ」

田中弟「なあ、楽しくやろうぜ。ここはキャバラなんだからさあ」

トイレから、右眉のないもうひとりのジ

ジイ（田中兄）が出てくる。

千夏「お帰り、田中お兄さん（おしほりを渡す）」

田中兄「ジョー！ー！ー！！ なにやってんだ

おまえ！！」

中年ジョー「あんたこそ、地獄のタナー兄弟が

実は田中兄弟って、俺をガツカリさせんなよ」

しおり「えー？ この人がさっき言ってたジョ

ーさん？」



田中兄「おう。俺が育てた世界チャンピオン」  
千夏「さつき真っ白な灰になって死んだって  
言ってた」

中年ジョー「そのジョーかよ俺は！！」

○同キヤバラ内、中年ジョーの席

がっかりしている中年ジョー。

中年ジョー「まったく、みんな嘘ばかりついでるよ」

アケミ、おしぼりを渡す。

アケミ「私はホントの事言ってほしいな。その人の等身大を見たいと思うもん」

中年ジョー「え？」

アケミ「ホントの自分でぶつかってくる人の方がステキ」

中年ジョー「そう？ だまされるなら、夢見た方がよくない？」

アケミ「中々いないよ、そんな一流のサギ師。

たとえばね、アケミがジョーさん好きだから指輪買って、とか言ったら信じる？」

中年ジョー「え？ 好きなの？ オレ。」

アケミ「だから買って。」

中年ジョー「ど、どこで買う？」

アケミ「買ってきて、お店で渡してね。」

ドギマギする中年ジョー。

バレないように笑いをこらえるミサキ。

ミサキ「ジョーさん名刺下さい」

中年ジョー「殺し屋は名刺なんか持ってないっす」

アケミ「(笑) おもしろい！」

中年ジョー「いや、ウケとかね、そういうことじゃなくて」

アケミ「分かった分かった。キラー・ジョーさんの話はホントなんだよね。あと、なんだっけ。後ろに立たれると嫌なんだよね。こんな感じ？」

椅子とジョーの間に入ろうとする。

中年ジョー「やめてよ」

ミサキ「(笑)」

アケミ「エッチは黙ってするの？」

中年ジョー「…ちよつと声出す」

アケミ「キーモーイ！」

ミサキ「イメージちがうー」

アケミ「やっぱウソだ！！」

ふたり大爆笑。

○キャバクラ店外、深夜

店から出てくる中年ジョー。見送るアケミ、ミサキ。

中年ジョー「はあ…。またケータイ番号ゲット出来なかったよ…」

○深夜、裏道

中年ジョー、くわえ煙草をプツと天に吹く。懐から左手で銃を抜き、全弾撃つ。空中のタバコ、はじかれて空中で踊り続ける。

中年ジョー「おつかしいなあ…。殺し屋って、リアリテイないのかなあ…」

○別のキャバクラ

樹利亜「お仕事、何なさってるんですか？」

中年ジョー「オレ？ …殺し屋」

樹利亜「えー…？ (笑)」

ジャスマン「またウソいつて！」

中年ジョー、しよんぼり。